

## [討論]



国際化推進機構 課長  
小唄 守氏

○**数野** それでは、これより第2部を始めさせていただきます。第2部は、第1部でのご講演をもとに、指定討論を行います。まずは、指定討論者の先生方をご紹介します。向かって左側から、異文化コミュニケーション学部教授、前日本語教育センター長の池田伸子先生。異文化コミュニケーション学部教授の武田珂代子先生。コミュニティ福祉学部助教のライトナー・カトリン先生。観光学部教授の韓志昊先生。総務部新座キャンパス事務室事務長の森田浩史様。国際化推進機構課長の小唄守様です。コーディネーターは日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授の丸山千歌先生です。それから、今、この会を録音させていただいておりますので、ご質問のある方も、マイクを使ってご質問をお願いいたします。よろしく願いいたします。では、丸山先生、お願いします。

○**丸山** ありがとうございます。充実したご報告を本当にありがとうございました。4時終了を目指しているんですけども、若干、ちょっと伸びるかもしれませんが、ここから、きょう韓先生が、教職員一体となって大学の国際化をというふうに言ってくださったんですけど、まさにそのような思いで進めてきておまして、本日も、森田さん、それから小唄さんをお迎えして、第2部を進めてまいりますと思います。では、やや全員早口で、言いたいことはみんなここで話すというようなことになるとは思いますが、小唄さんからコメントを、どうぞよろしく願いいたします。

○**小唄** 座って？ 立って？

○**丸山** どちらでも。

○**小唄** それでは、立ちます。国際化推進機構の小唄です。よろしくお願いいた

します。

まず、2014年度に策定した立教大学の国際化戦略ですが、「Rikkyo Global 24」、これは池田先生から、あとは丸山先生からも言及がありましたが、正確な数字をお伝えしておきます。留学生を当時の500名から2024年に2,000名、10年間の計画で4倍にふやすということです。そして全学生の海外体験を2024年までに実現する。更に、協定校数を、当時の133校から2024年に300校へふやす計画です。300校を目標にしておりまして、現在は190校ですね。次のコンテンツとしては、留学生数の目標と現状、そして3番目、派遣留学者数の現状、そして短プロの戦略的利用、そして5番目、海外大学の国際交流担当者の話ということで、私が最近ヒアリングしたお話をしようと思います。そして最後に課題をお話したいと思います。【スライド⑥-1】

こちらは2024年に向けた、留学生数の内訳なんですけど、これを見ていただくと、2,000名がどういう内訳になるかがわかります。ただし、この内訳はこういう目標を立てたときに、どんな対応が必要かということシミュレーションするためのものです。学部学生が、2016年度の312名から、1000名を目標とする。これは非常に大きいですね。そして大学院学生が296名から300名、そして交換留学生である特別外国人学生が、296名から350名。そして短プロ学生は、2016年の17名から350名。この一番最後、短プロ学生を増やして2,000名を実現しようというような計画になっています。

そして、現時点の留学生数ですが、これは下の表の2を見てください。2017年10月20日現在で865名です。学部学生が382名、大学院の前期が270名、そして後期が36名ということで、学部学生の目標が約400名ですから、あと2倍ちょっとですね。最近では、例えば経済学部は非常に多くの留学生が入学しており、現在の経済学部の留学生数と同じ比率で他の学部も入学者をとると、この1,000名を達成することができるので、それほど、無理のある数字ではありません。

そして、大学院生は既に目標の300名に達しております。

そして、交換留学生については350名を目標にしておりますが、これも今、春に180名、秋に177名、両方で約350名ですから、これも達成しております。そして最後は、問題の短プロ学生ですね。初年度17名で、目標が350名ということですから、相当挑戦的な数字が掲げてあります。

ただし、日本語短プロだけではなくて、観光学部や経営学部や、グローバル教育センターなども、短期で学生を受け入れていますので、350名はいかないですが、現時点でも、100名は超えていますので、この2,000名という数字も、まったく不可能ではないのかなという状況かと思っております。

次に、留学生数の割合の話ですが、この表を見ていただくと、上の表なんですけど、特別外国人学生、これは交換留学生ですね。半期または1年の留学が現状で言うと350名。そして、短プロの学生が17名。短プロの学生の目標は350名で、これは1対1の比率なのですね。1対1の割合で、今回、立教大学は交換留学生と短プロ学生を募集しようとしているような状況です。将来の目標としてですね。【スライド⑥-2】

ところが、立教大学の派遣の学生が、海外留学で、どういう割合で行っているかということ、今年度合計約1,200人が立教大学の正規のプログラム留学する予定ですが、そのうち7割強が短期プログラムで、3割弱が半期または1年の留学になります。

我々の大学としては、留学生受け入れについては、長期の交換留学と短期プログラムを1対1の割合で設定している。ところが本学の派遣留学では、長期が3、そして短期が7ということで、圧倒的に短期が多いのです。そう考えると、立教大学は、短プロの目標値を上げてもいいのではないのかというところがあります。

実際、これは海外の大学、アメリカの幾つかの大学に聞きましたが、長期が3、短期が7というような計算になっているようです。

次に派遣留学生数の現状です。海外の大学と、立教大学と、そんなに短期と長期の海外留学の数というのは、そんなに変わらない印象です。これも直近会った大学で幾つか聞いただけですから、統計的なものではないですが、感覚的には立教大学と近いのかなという印象があります。

そして、短プロの戦略的利用ですが、短プロの実施自体、もちろん今まで先生方が語ってきたように、それ自体に意味があるわけですが、協定校の開拓を担当する身からすると、この短プロをいかに魅力的に見せて、戦略的に使っていくのかということがあるわけです。立教大学には、GLAPという、Global Liberal Arts Programというプログラムがあるのですが、これは1学年20名のプログラムで、その学生を全員、海外のリベラルアーツカレッジに派遣するというようなプログラムでして、このリベラルアーツカレッジって、皆さんご存じだと思い

ますが、学生数が1,500とか2,500とか、その程度の小規模の学校なんですね。そういったところに立教大学の学生を派遣する。立教大学は2万人規模の大学ですから、海外に行く人も多いでしょうけれど、1,500人ぐらいの大学で、海外に、もしくは日本に来るのかといったら、なかなか難しいですね。

ところが、立教大学では、その学生たちを全員、そういうリベラルアーツカレッジに派遣するというふうに広報していますので、その協定校開拓で、国際センター及び、国際推進機構はなかなか苦労して。実際は、順調ではあるのですが、まだまだふやさなければいけないという現状がありまして、そのとき、単なる交換留学、1対1の交換留学、2対2の交換留学という、やっぱり来られないわけですね、先方が。やはり、先ほど言ったとおり、短期のプログラムに行く学生が多いわけですから、短期のプログラムを魅力的に見せて、我々は長期で派遣したいのですが、そこでのバーターというようなことを実現しなければいけない。

実際これは、立教大学とアジアの協定校の中でもすでに起きていて、立教大学の学生は、具体例を挙げますと、中国の山西大学という立教大学の協定校があるのですが、そこは非常に歴史が長くて、昔は交換留学を非常にいいバランスでやっていたのですが、最近、北京の大学や上海の大学や、そういった都会の大学が非常に人気がありまして、山西大学というのはちょっと地方の大学ですね。そういった大学がちょっと人気なくなってきたんですね。そうすると、立教大学から学生は行かない。先方からは来る。そしてインバランスが起きるという現状がありまして、そこは先方と話しまして、立教大学が2名の交換留学生を受け入れる。そして、立教大学から先方大学には、20名の短期の学生を派遣するという事でバランスを取ろうということで、今回、バーターを成立させています。

そしてまた、これはほかにもあるのですが、香港中文大学と。ここも名門の大学なんですが、実は立教大学の学生が行かない。先方は非常に気にして、短期のプログラムに無料で招待するというようなことをやっております。そういった形で、今回の立教大学の短期の日本語プログラムについても、機構の中で、ある枠についてはご招待するというような形での枠を取っておりまして、これは部長会、大学の執行部会で決まっておりますので、それを、餌じゃないですが、そういった、立教大学に来やすいような、長期の留学ではなくて、短期で呼びできるような環境をご用意して、そして提供するという形での利用を今しております。

す。最近訪問した、カナダのリベラルアーツカレッジでは、立教大学は半期派遣し、先方からは短期で2名受け入れるような協定の申し出がありましたので、そういった意味では、今回の短期プログラムが、短期プログラム自体としても、もちろん役立っているわけですが、そして国際センターの活動にも非常に役立っているというような現状がございます。

それと、あと最後です。5番目が海外大学国際交流担当者の話ということですが、このシンポジウムに参加するに当たって、私も、せっかく参加するんだから、ちょっと聞いておこうと思って、海外出張が最近1回ありましたので、2大学に、この短期プログラムの重要性というか、留学のトレンドについて、立教大学の訪問した大学からのそういった話を聞きました。

ところが、短期プログラムをぜひ進めましょうという話を聞けるかと思ったんですが、長期留学のプログラムの話を私たちしに行っているわけですから、やはり、長期プログラムこそ重要だという話で、ちょっと思ったように話が聞けなくて、もちろん向こうも国際交流の担当者ですから、できるだけ長く留学させたいという思いがあって、そういう風に私の話には乗ってくれなくて、ぜひともお互いに長期留学を増やして頑張りましょうというような、そういったコメントを2大学からもいただいちゃって、ああ、ちょっと困ったなと。きょう話す話なくなるな、なんて思ったのですが、最近訪問のあったオーストラリアの大学と留学のトレンドについて話したところ、やはり長期留学は微増、短期留学はかなり増えているということで、そこを解消しなければいけないけれど、傾向としてはそうだと。

それは、どうしてですかと聞いたら、オーストラリアの国の事情もあるかもしれませんが、オーストラリアは、学生は、自分の留学とかは自分で稼ぐというんですね。親のお金ではない、自分が稼がなければいけない。そして、あとは奨学金を得るということですので、なかなか、長期留学に行く費用の費用捻出が難しいということを書いていました。

あとは、そうですね、何を言っていたかというのと、もう一つは、長期留学で難しいところについては、やはり日本語を目指している方は、日本語ができて、日本で日本語で勉強しようという方はいいんですが、英語で学びたいという方については、立教大学だけではなくて、多くの日本の大学がそうであるように、英語の展開科目が足りないということですね。1年間なり、半期なり留学して、十分

な単位を持ち帰れないということが非常に大きなネックになっている。

あとは、授業スケジュール、これも留学に来にくい。半期とか1年で、日本と海外の留学の授業スケジュールは違いますから、そういったところで、日本の大学、立教大学と授業スケジュールが合わなくて、日本には来たいのだけど、長期では来れないから短期を選ぶという理由をオーストラリアの大学の方は話していました。

最後、課題というところになりますが、これは先ほどの池田先生の話も非常にかかわるところなんですけど、やはり学部の協力が欠かせないということですね。これは先生がさっきおっしゃったことと同じで、学部が何かを提供しなければ、どうにもならない話なのです。事務局が幾らフレームワークを作っても、学部も、学部の先生方が、「よし、一肌脱ごう」と言ってくださらないと何も始まらない。そこが非常に大きなネックで、池田先生のおっしゃるとおり、システムで、丸山先生が走り回って人をつかまえるのではなくて、やはり大学のシステムとして、そういったものを設定しなければいけないということ。あとは、受け入れ環境。やっぱり事務局ですかね。これも非常に重要でして、先生方だけではやはり回りませんので、こういった短期のプログラムを受けるに当たっての、事務の環境整備ということも非常に大きいか。要は、人手不足というところをいかに解消するのか、もしくはそういった組織をいかにつくるのか。短プロの話ができて、一体、この事務局、誰がやるんだ国際化推進機構でも、観光にかかわる短プロを来年の春に行うのですが、プログラム自体は観光学部が行い、広報は立教大学の中国事務所が行う。さあ、では、果たして学生が来たときに、彼らの面倒を見る事務局は誰なのかというようなところで難しい問題があって、国際化推進機構でやっていくわけなんですけど、なかなかそういった問題もあるのかなと思います。

あとは、もちろん、短期日本語プログラム、日本の宿泊事情、大学に大きな寮がないとか、そういった問題がありまして、何か小さな話のようなのですが、実は宿泊先というのも結構難しいところかな。規模が大きくなれば、大学には寮がありますけれど、そこで数は十分じゃありませんので、近隣のホテルですとか、そういうのを使うんですが、意外に確保が難しいという状況があります。長くなりましたが、私の話は以上です。

○丸山 ありがとうございます。やっぱり小塚さんに来ていただくことで、私

たち登壇者からは出てこない視点というのを幾つか出していただいたと思います。  
ありがとうございます。

続けて、森田さん、お願いできますでしょうか。

## 【スライド⑥-1】

1. rikkyo global 24  
留学生数500⇒2000名  
全学生の海外体験  
協定校数133⇒300校
2. 留学生数の目標と現状
3. 派遣留学者数の現状
4. 短プロの戦略的利用
5. 海外大学国際交流担当者の話
6. 課題

## 【スライド⑥-2】

## 1. 2024年に向けた外国人留学生受入数の目標値内訳(案)

	2016年度	2024年度
正規外国人留学生 学部	312 →	1,000
正規外国人留学生 大学院・前期及び後期	269 →	300
特別外国人学生	296 →	350
短期プログラムによる受入学生	17 →	350
合計	891 →	2,000

## 2. 外国人留学生(2017年10月20日現在):865名

		2016年度		2017年度		前年比
		春学期	秋学期	春学期	秋学期	
正規外国人留学生	学部	312	310	384	382	72
	大学院・前期	212	227	257	270	43
	大学院・後期	43	43	39	36	-7
特別外国人留学生		161	163	181	177	14
	合計	728	743	861	865	122

## [討論]



総務部新座キャンパス事務室 事務長  
森田 浩史 氏

○森田 新座キャンパス事務室の森田と申します。残り時間があまりありませんので、手短かにコメントさせていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

私が所属している新座キャンパス事務室は、主に総務業務を担当しております。短プロに関わる業務ですと、太刀川記念交流会館の宿泊や学内諸施設の予約ですとか、留学生のホームビジットを始めるにあたっての新座市と日本語教育センターとの橋渡しなどを担当しております。前半の先生方のお話しも踏まえつつ、若干コメントさせていただきます。

私は、今年の4月から、池袋から新座キャンパスに異動になりました。6月に短プロが始まるということで、歓迎会、歡送会への出席依頼が日本語教育センターから、私の所属する新座キャンパス事務室をはじめとした関連各部署にありました。そして、私は立場上歓迎会で挨拶をすることになったのですが、担当の方からは「挨拶は基本的に日本語で結構ですが、なかには、日本語をよく理解できない留学生もいますのでよろしくお願いします。」との説明を受けました。私は、基本は英語で話すべきだと考え、大変動揺しました。仕事柄様々な場面において人前で話すことは間々ありますが、今回は初めて外国人を前に英語で挨拶することになるので、大変なストレスを感じて歓迎会を迎えました。当日は、Googleの検索システムでチェックをしながら作ったメモを持って臨みましたので、無事挨拶を終え、何人かの留学生ともお話をすることができて、大変楽しい時間を過ごすことができましたが、私自身は、そのような状況だということをもまずご理解していただければと思います。

立教大学は2014年の国際化戦略「Rikkyo Global 24」、文部科学省「スー

パーグローバル大学創成支援（グローバル化牽引型）」の採択以来、様々な国際化、大学改革を急速に進めております。私たち職員については、いろいろな施策の中の一つとして、「職員の国際化対応力の強化」ということを謳っております。本学のホームページには、

‘海外の大学における実践的トレーニングなどの職員能力開発制度を拡充し、外国人留学生や外国人の教員に対応できる国際感覚と、英語力を身につけた職員を育成していきます。そして、2019年度までに、TOEIC730点以上を有する専任職員の比率を20%にします。’

という目標を掲げて、人事課も種々の研修を展開しています。その一方、私自身を振り返ってみますと、6月の短プロ歓迎会、歓送会において、数年振りになんと英語で会話したというような状況です。駅でお年寄りの方が切符を買えないで困っていると、私は積極的に声をかけますが、外国人の方が買えないで困っていても声はかけません。職場で、留学生が窓口に来て、英語の話せる若手の職員に任せてしまうのが常です。

現在の立教大学にはTOEICで900点取るような専任職員も多数在籍しておりますし、徐々に各部署の窓口でも英語での対応ができるようになってはきていますけれども、先ほど話された小塚さんのような例外を除くと、特に私のような50歳以上の世代には、英語、留学生ときくと、とたんに内弁慶になってしまう職員が多いような気がいたします。今回、初めて少しだけですが短プロに関わらせていただき、職員が、英語能力を高めるということは当然のこととして、一人ひとりの職員が、現状より、もう一歩、能動的に留学生に関わるという意識を持つことがとても必要だと感じました。従来より立教大学は教職員と学生の距離が近いという伝統があります。職員が、日本人の学生に対して関わるように留学生にも関わるのができれば、それが立教らしいグローバル化の構築に繋がるのではないかと考えます。また、職員の間には、留学生の問題は国際センター、国際化推進機構といって、逃げてしまう風潮が少なからずあります。キャンパスの国際化は、当然、大学全体で取り組む問題ですし、職員組織が一丸となって受け止め、関わる必要があるだろうと思います。

そのためには、先ほど申し上げました本学のホームページに掲げてある「職員の国際化対応力の強化」についての検証を不断に行うとともに、スキルアップだけでなく職員の意識改革を目指した取組みも必要と考えます。これがコメントの

第1点です。

次に短プロの行われている新座キャンパスのことを少しだけお話しします。ご存じかと思いますが、この池袋キャンパスと比べて大分小さなキャンパスです。池袋の学生数1万5,000人、新座は5,000人。専任職員数は全体で300人程度ですが、そのうち新座に常駐している者は、おそらく40人程度だと思います。一言でいうと新座は構成員の「顔の見えるキャンパス」です。そのためか、部署間の敷居がとても低く、この傾向は教員と職員、教職員と学生との間にも当てはまります。キャンパスの中を歩いていると、知った顔に何人も会いますし、知らない学生から、「こんにちは。」と声をかけられたりとか、そういった雰囲気のカンパスです。

規模が小さい分、教職員間の連携がよくとれ、迅速かつ円滑に対応ができるメリットがあります。具体的に申し上げますと、例えば冒頭にご挨拶いただいた豊田キャンパス連携担当副総長を座長にして、3学部の学部長、総務部、学生部、教務部の部長が、キャンパス固有の課題について、協議し、政策立案を行う新座キャンパス協議会があります。また、新座キャンパス事務連絡会では、キャンパス固有の課題について部署間で共有し連携を図ります。規模が小さい分、様々な課題に対して教職員が一致団結し、迅速かつ円滑に対応してきたという伝統が新座キャンパスにはあります。

このキャンパスの特性を生かして、短期日本語プログラムへ効果的な支援していくことができるのではないかと考えます。日本語教育センターの方に音頭を取っていただきながら、先ほどお話ししました、新座キャンパス事務連絡会でアイデアを出し合うことで、より良い企画ができるのではないかと思います。キャンパス全体で短プロを支えるという意識も生まれるのではないかと思います。新座キャンパスの「Global ラウンジ」ですが、いつ見ても人がいない状況で、どうしたものかと思っています。関連部署の連携の下、日本語教育センターの方が中心になって、いろいろな仕掛けをつくることで、留学生たちのたまり場、学生同士の交流の場としてもっと活用されるようになっていけばいいなと思っております。

最後になりますが、キャンパスの国際化の推進は、けて担当部署だけの課題ではなく、大学全体、キャンパス全体の問題ですので、新座キャンパス各部署が連携しながら対応していきたいと思えます。また、職員一人ひとりの意識の持ち方を変えることによって、国際化も大きく前進するのではないかと考えます。そ

して、この短期日本語プログラムが、新座キャンパスの国際化をより推進する大きなきっかけになるのではないかと期待しながら、引き続き微力ながらご協力していきたいと思っております。ありがとうございました。

○丸山 ありがとうございました。昨年度のトライアルのときは、阿久津さんにサポートしていただいて、今年、初めて森田さんにお会いしたのが短プロの歓迎会のときだったのですが、ちゃんとサポートしていきますから大丈夫ですよというふうに、言っていたのが初めの一言だったのを、思い出しております。加えて、今大変心強いコメントを頂戴いたしまして、ありがとうございます。

4時10分でございますけれども、会場の方から事実確認でも、それから、今日お感じになったことでも結構ですので、コメント、ご意見、またご質問を頂戴できればと思いますが、いかがでしょうか。豊田先生、ありがとうございます。

○豊田 それでは、簡単にコメントさせていただきます。きょうのシンポジウムは、私にとっては日本語教育センターから大学への要望を示す機会のように思われました（笑）。

私から2点コメントさせていただきます。1つは、やはり短期日本語プログラム、あるいはその中の目玉と言っている、この日本社会文化講義ですが、これをやはり制度として構築していくシステムが必要なのだろうということを、私もこの場にいる人たちと意識を共有しているつもりです。私が講師の方をお願いするときも、やはり個人的なネットワークにどうしても頼ってしまいます。そうすると、以前貸しがあるあの人だったら断らないだろうか、こういうことを考えたりしてしまうわけです。それから、システムとして、やはり謝金も安いのですよね。これもお願いするときは申しわけないくらいになっていますので、こういうことも考えなくてはいけないでしょう。

この場にいる人たちは、だいたいそういうことに理解があると思うのですけれども、大学の他の人たちには、多分そういうことがうまく伝わっていないと思うのですね。私は、前に観光学部で、アジア人財プロジェクトというのを引き受けたときに、日本語教育というのは学部の中で調達したこともありまして、理解はあるつもりなのですが、大学の他の人たちに、こういうこと、つまり短期日本語プログラムの重要性が伝わっていないなと感じます。感じますと言っていると、何か人ごとのように言っているようですが、これは私自身もそういうことをほかに伝えなくてはいけない立場だと思っています。機会あるごとに、そういうことを大学内に伝えようと思っております。また伝えなければいけないと思っております。これが1点目のコメントですね。

それから、ちょっと付け加えますと、これは学部の持ち回りのような制度でもいいのですが、ただし持ち回りにして、ちょっと嫌々やってもらっても困ったりします。でも、もしかしたら丸山先生がうまく言っていて、最初は嫌々でも、ちゃんとやっていただけるのかもしれない。ただ強調したいのは、これは学部にとってもメリットがあるのだということ、つまり学部・研究科の宣伝になるのだということをも十分伝えて、十分理解していただくことが重要なことと思っております。

もう1点は、これも何人かの先生方、何人かの方がおっしゃっていましたけれども、やはりこれは留学生の人、海外から来る人だけではなくて、立教の学生にもメリットがあるということですね。やはり疑似留学体験というのでしょうか、疑似海外体験のようなことになりますので、留学あるいは海外経験のハードルの高い人にも、そのような体験ができるという、こういうメリットがありますので、それも学部、研究科に十分伝えるべきだろうと思っています。

それから、やはり学部生が深くかかわるようになりますので、単位化ということも考えていだろうというのは私も思っていて、おそらく日本語教育センターが出すのは現状では難しいかもしれないのですけれども、学部の中で融通できるように科目に対応させて、学部がそういう行動、そういう活動を行った学生に対しては単位を出すというようなことから始められないかなと思っています。そういう意味では、これも学部、研究科などにメリットがありますので、この辺を十分に伝えられればいいかなと思っています。とりあえず以上、私からのコメントとなります。

○丸山 ありがとうございます。さっき、休憩のときにお話をちょっとしたんですけれども、豊田先生に初めてお会いしたのが、2016年、短プロの初回のトライアルのときでして、実際に書道体験プログラムを見てくださるということ、まず第一報で聞きました。その後、クロージングのセレモニーのときに、お目にかかることができ、そこをきっかけに毎回の短プロの日本文化社会講義の3先生を探す旅に、ちょっと光が見えてきたのを、今思い出しています。ぜひ、これからもよろしく願いいたします。

では、ほかの皆様、いかがでいらっしゃいますでしょうか。今の豊田先生のご発言を受けて、何かこちらのほうから。

○池田 いろいろとお考えくださり、また働きかけていただけるということで、大変ありがたく思っています。よろしく願いします。日本語教育センターというのは、すぐには難しいかもしれないというお話があったんですけれども、すぐには難しいかもしれないけれども……という、「……」で、もう10年近くたっているという状況がありまして、それから大学の国際化をめぐる状況も随分変わってきていますし、それほど難しくないと考えていますので、ぜひとも日本語教育センターが、日本人学生と短期留学生、あるいは正規留学生が、ともに学ぶ科目を提供していくことについて、ご検討をお願いできないかと思っておりますので、

よろしくお願いたします。

○丸山 あと、韓先生もきっとコメントがありではないかと。

○韓 講義を担当した後、丸山先生と振り返りのお話をして、これはぜひ単位化をして、いろいろな学生を巻き込んで展開するのがいいのではないかと話をしました。その後、最後のフェアウェルパーティーでその話になりまして、ちょうどそこに来ていただいた新座の職員の方とお話をしましたら、すごく積極的に話にくわってくださりまして、そのあとはいろいろ調べてもくださったんですね。



それで全カ力で展開したときに、どういう問題があるかとか、もし新座キャンパスだけで提供したら、どういう問題があるかということで、いろいろ調べていただきましたが、あまり現実化するようなどころまでは見えなかったですね。

しかし、今日、池田先生の話聞いて、もしそれが、日本語教育センターから提供されるということでしたら、一番手っ取り早く、すぐ現実化できるようなことかなと思います。なので、ここでお2人の話を聞いて、1人で確信しております。これは実現できるだろうと。

○豊田 そうですね、私もちょっと、古い固定観念にとらわれているのかもしれないですね。そういえば、全カ力で出している他の科目などのこともいろいろ考えていけば、日本語教育センターで単位を認めるというのができるかもしれないなど、ちょっと思い始めました。この辺はやっぱり考え方を転換させて、それを目標にすると、どういうことができるだろうかということで、考えられるかなと思いました。

○丸山 大変、力強いお返事をいただきました。何かこう、10学部全部一緒にというふうを考え始めたときの仕掛けづくりは結構大変なのかなと思うんですけども、小さいデザインで始めて、これはうまくいくかもしれないと思ったときに、デザインをもう少しいろいろな学生を巻き込めるような形で提案するという考え方もあるかなというふうに思っています。何かお役に立てることがありましたら、いつでもやりますので。



はい。ほかに、皆様いかがでしょうか。短プロ、日本語コーディネーターの藤田先生、いかがですか。

○藤田 日本語教育センターの藤田です。短期プログラムのここの教務を担当しております。先生方、お話ありがとうございました。日本語科目の中でも、参加者からやはり、文化社会講義についての感想、すごく声を聴くことがあります。先生方のお話の中にもありましたとおり、やはり目玉なのであろうなとも感じています。きょう、先生方の中から、ゼミ生を巻き込んでとか、立教生を巻き込んで

というお話をすごくいただいたと思うんですけども、具体的にどんな声があったのかというのを、もう少しお聞かせいただけたらと思うんですが。

○丸山 参加したゼミ生から、どんなフィードバックがあったかと。

○カトリン 私のところは、発表の中にもあったんですけど、新座は、留学生がそんなに多くない状況にあって、なかなか留学生と交流する機会もないので、そういう意味では、今回の短プロというのは学生がそういった交流のできる機会ができてよかったというのはすごくありますね。あとは、特にその中で、英語を実際に使って話す機会があったというのは一番でしたね。スポーツ、実際に運動会をやって、楽しかったというのも学生の感想としてありましたね。

○韓 何よりも、日本語をここまで好きになってくれて、日本を好きになって、来るという、高い授業料を払って来る学生がいるというのに、学生はすごく感動したようで、もう何でもやってあげたいというような、日本人の学生は基本的にすごく優しいですね。なので、世話したいという気持ちがあって、質問には全部答えてあげたい、でもそこに限界があって、日本のこともよく知らない、それを英語で表現するのはもっとわからないということで、もっとしっかり、日本人として勉強しないといけないと感じたそうです。また来る前に、ここまで日本語ができるようになったということにすごく刺激を受けますね。

なので、日本にいても、自身も英語とか、ほかに中国語とか、第二外国語を勉強するときに、ちゃんと意欲があればできると刺激を受けて、その後、いろい

ろなことに挑戦したりしています。例えば、その後、ほかのプログラムがあったときに、積極的に手を挙げます。実はその後、観光学部で、学生にあまりなじみのない国から、外務省の招待で、日本の観光を見学するプログラムで来学したことがあります。すごく短い時間でその国について調べて、英語でプレゼンをするワークショップに、ゼミ生ほぼ全員が手を挙げて参加してくれました。一つの経験が次の段階の挑戦につながるなと思いました。



○丸山 ほかにいかがでしょうか。

○富倉 日本語教育センターで兼任をさせていただいております富倉と申しますが、私がちょっと聞いていて思ったのは、短期日本語プログラムに参加した留学生のフィードバックというのはどうなっているのかなと。例えば、もともと何に興味を持って参加して、そのプログラム終了後、満足度、例えばそれが長期につながる意見とかあったのかなというのがちょっと気になりました。

○丸山 ここは私からでよろしいですか。短期日本語プログラム参加生については、まず事前にアンケート、オンラインで実施していきまして、どんなテーマに興味があるかとか、それからレベルはどのくらいかとか、いろいろなことをたずねています。また、事後には、こちらオンラインのグーグルアンケートですが、フィードバックをもらうようにしております。短期プログラムがすごく楽しかったというような意見もありますし、それから立教の環境のよさですね。学ぶ設定のよさとか、それから、やっぱり立教生と交流ができたことへの満足についてもコメントをもらっています。

全員では、必ずしもなくて、一部の学生、ちょっとずつではあるんですけども、立教に将来留学したいので、学部の先生と話してみたいとか、そういったこともありまして、実際に学部の先生とお話するというような機会をつくったりというようなこともございました。

それから、立教の学生のほうでは、先ほど小塚さんから、GLAPのプログラムがあるというお話があったと思うんですけども、その学生たちが留学するかも

しれない大学から参加生が来ていたということもあって、一体どういったキャンパスでの生活があるのかということ、情報交換したりというような場があったとか、そういったフィードバックを得たりということもしています。よろしいでしょうか。

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。ちょっと予定よりも時間が25分延びております。大変活発にいろいろお話しいただきまして、ありがとうございました。今回のプログラムでは、今回のシンポジウムでは、短プロの2年目を迎えて、次、4回目の短プロに向かう時期でのこの企画でございましたが、日本語教育センターの関係者が持っている可能性や課題というのを、日本文化社会講義にかかわってくださった学部の先生方、そして職員の方々、そして総長室の豊田先生ですね、立教の学生たち、それから学外の方もいらっしゃる、RiCoLaSの戸井田さんも来てくださって、いろいろな立場の方々と、このお話を共有することができたというのが、一番大きな成果かなと思います。

日本語教育センターとしては、次の、また来年度の短プロに向かっては、きょう、新座キャンパスの国際化というので、グローバルラウンジのお話が挙がっていましたが、ぜひそこに挑戦していきたいというアイデアがあります。本日諸部署に、大丈夫とお願いしたので、遠慮なくご相談に上がって、大学の国際化に役に立つ短プロというのを展開してまいりたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。(拍手)



○数野 どうもありがとうございました。以上をもちまして、本日のシンポジウムを終了させていただきます。本日は長時間にわたりご清聴いただきまして、まことにありがとうございました。先ほどお配りしたアンケートですが、入り口付近に係の者がおりますので、お帰りの際にご提出いただけますよう、お願いいたします。また、次回以降のシンポジウムについて、ご案内を差し上げたいと思いますので、よろしければ、入り口にございます用紙にメールアドレスをお書きください。

会場は4時40分に閉めることになっております。あと15分ほどですが、お手荷物をご確認の上、お忘れ物のないようご注意ください。それ以降のご歓談は、こちらの建物の1階、もしくは中2階のグローバルラウンジをご利用ください。本日は、どうもありがとうございました。